

Title	南洋を東西洋に分つ根據に就いて
Author(s)	宮崎, 市定
Citation	東洋史研究 (1942), 7(4): 197-218
Issue Date	1942-08-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145771
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

東洋史研究

第七卷
第四號

昭和十七年八月發行

南洋を東西洋に分つ根據に就いて

宮 崎 市 定

今日の如く、亞細亞を東洋、歐羅巴を西洋と稱する習慣が成立する以前、支那には古く東洋・西洋の稱呼があり、只それが實は現今の南洋地方を東西に分つたものに過ぎぬことは、事新しく説明する迄もない。扱これが如何なる標準によつて東西に分けられたかに就ては、既に前人の研究が再三發表されてゐるのであるが、些か腑に落ち兼ねる點もあるので、此に再び取り上げて問題として見たいのである。

日本で最初にこの問題を論ぜられたのは故坪井九馬三博士であるらしい。博士が東洋學藝雜誌第二五六號に載せられたる「明代ノしな人が知リタルしな海いんど洋ノ諸國ニ就テ」といふ論文は、實は未だ寓目の機會を得ないでゐるが、之を祖述された和田博士の言によれば、坪井博士はこの中で、東西洋を地理的區劃と見てはならぬとを力説されたものゝ如くである。

次に出したのは史學雜誌第三十一編に連載された高桑駒吉氏の「赤土國考」であり、氏はその第三回の終の所で予は明人の東洋西洋の區別はもと馬來人及び波斯人が Monsoon を基礎としてゐる方法を探つたのであると考へる。

と云ひ、馬來人が馬來半島から西を風上と呼び、東を風下と呼んだこと、及び印度方面で波斯の航海者が印度の東南海岸以東を風下と稱し、以西を風上と稱したこと等を述べ、

是の如く馬來半島及び印度洋方面に於て古くから Monsoon により東西の區別があつたとすれば、是等の方面に盛に交通した明代の支那人が風上風下の區別を探らずして方向の區別を探り、其の南京金陵に近い浙江省寧波府の鎮海を基點として澎湖島から渤泥に至る針路を東洋とし、福建、廣東の沿海を経て交趾支那を過ぎ暹羅、馬來半島、爪哇、蘇門答刺、印度方面に至る針路を西洋としたのであらうと思はれるのである。

と結んで居られる。この高桑氏の結論は表現が甚だ不明瞭で、正確な意圖を捕捉するに苦しむが、之に對し和田清博士は東洋學報第十二卷第三號に「明代以前の支那人に知られたるフィリッピン諸島」を發表され、モルツカ諸島が必ずしも風下でないことや、臺灣地方が風下にあり乍ら實は東洋列國の數に入つてゐないことを指摘され、東西洋の區別は當時の支那人が航海に用ふる東洋針路、西洋針路の方角から出たものであることを主張された。

次に出したのは東洋學報第二十一卷第一號所載、山本達郎學士の「東西洋といふ稱呼の起原に就いて」なる論文である。山本學士は東西洋の稱呼は明代に始まるにあらず、その根源は元代にあるを指摘し、元の汪大淵の島夷誌略を取り、元人の所謂東洋、西洋とは具體的に何地方を含むやを歸納的に究明せんと努力し、東洋は菲律賓より爪哇に至る相當廣範圍に亘る地方を指すが、西洋は南方印度の局限されたる地域を指し、その中間に中洋とも

稱す可き地帶あり、この方法が本來の東・西洋の分ち方であつて、後に東西兩針路の發達により、兩航路に沿うて東西洋が區分さるゝに至つたと結論として居られる。

以上前人の所説を簡單ながら紹介したのは、單に余がこれから述べんとする所の重點が那邊にあるかを豫告しおかんが爲であつて、之に對し一々批判を加へるは余の目的とする所でない。只問題の重點を逸せざらんが爲に、更に豫め數言を費して、余の立場を明かにしておきたいと思ふ。

そは、山本學士は東西洋の稱呼は元代に迄遡る可きことを説かれたが、余は更に、東西洋の思想は少くも宋代に溯る可きことを云はんとする。原來東・西洋とは、より正しく云へば夫々東南洋及び西南洋となる可きものである。而して宋の周去非の嶺外代答には、明かに東南諸國と西南諸國、又は東南海上諸國と西南海上諸國との對立せる名稱を見出す。これこそ後世の東洋と西洋に相當するものであり、從つて東西兩洋は所謂南蠻、海南夷、西南夷等の範圍を承け嗣ぎしもので、臺灣・琉球等の古來東夷と稱せられし國は當然除外さる可き筈である。只西域と南蠻との境界は古來甚だ不明瞭にして、天竺國の如きは、宋書には西南夷、梁書には海南夷、新唐書には西域傳に列せらるゝが如きことあり、之と同様に西南海上諸國及び西洋諸國も、その西端は極めて曖昧模糊たらざるを得ぬことを豫め斷はつておかねばならぬ。

二

支那には古く四海の名あり、南海は其の一である。南海は他の東海、北海などの如く、最初は海そのものを指したに相違ないが、轉じて南海の濱、即ち支那南端の海岸地方をも意味するやうにもなつた。左傳僖公四年の條

に楚子の語として

君處北海。寡人處南海。

とあるのや、襄公十三年の條に、楚の共王の事業として、

撫有蠻夷。奄征南海。

などあるは何れもこの意味である。秦の始皇帝が南越を平ぐるや、今の廣東附近に南海郡を置きしことは有名な事實である。

然るに其後廣東方面より、海外諸國との交通貿易盛となるに及んで、海南夷なる語が生じた。梁書諸夷傳の海南諸國には林邑、扶南、盤盤、丹丹、干陀利、狼牙脩、婆利、中天竺、等を列してゐる。所が聽てこの海南諸國を南海と呼ぶやうになつた。その起原は尋ね可くもないが唐の李肇の唐國史補卷下に

南海船外國船也。

とあつて、南海を海外諸國の意味に用ひてゐるのを見ると少くも唐の憲宗頃には、現今の南洋と略同意義の南海なる語が成立してゐたことを知るのである。

この南海を更に區分して東西とすることは何時に始まつたか明かでない。既に宋書夷蠻傳は南方諸國を

南夷 扶南國

西南夷 呵羅單國 婆皇國 婆達國 閼婆達國 師子國 天竺迦毗黎國

といふ風に、南夷と西南夷に分類するが東南夷がない。明瞭に南海諸國を分つて東南諸國、西南諸國としたのは宋の周去非の嶺外代答を以て始とするやうである。

嶺外代答には淳熙戊戌五年の自序がある。その卷二卷三が外國門とあり、中に正南諸國、東南諸國、東南海上諸國、西南諸國、西南海上諸國の稱呼が散見する。今此等の名稱によつて分類されたる諸國の中、主要なるものを取出して表示すれば次の如き結果を得る。

東南海上諸國	沙華公國	近佛國註①	女人國
東南諸國	闍婆		
正南諸國	三佛齊		
西南諸國	占城	眞臘	窰裏
	大秦	西天竺	
	麻離拔	大食	
西南海上諸國	占城	眞臘	佛羅安
	細蘭	故臨	大秦國
	王舍城	天竺國	
	大食	木蘭皮	
	波斯國		

右の表によつて直ちに看取さるゝ事實は、第一に西南諸國と西南海上諸國は略々其の範圍を同じくするが故に西南諸國は即ち西南海上諸國の謂に外ならず、従つて東南諸國は亦東南海上諸國と同意義なる可きこと、第二に東南諸國と西南諸國は、三佛齊即ちスマトラ島東部を中心として分たれ居ること、以上の二箇條である。

然らば如何なる理由によつて、三佛齊を中心として東南海と西南海を分つかの疑問が生ずるが、之が解決を示唆するものは、三佛齊が正南諸國の中に數へらるゝ事實を措いて外にない。抑も三佛齊は何地の正南に當るであらうか。而して斯る場合に吾人は、今日の完成されたる地圖によつて方向を摸索してはならぬので、飽迄當時の人の智識によつて之を探索せねばならぬことは云ふ迄もない。

嶺外代答卷三航海外夷の條に

三佛齊之來也。正北行舟。歷上下竺與交洋。乃至中國之境。其欲至廣者。入自屯門。欲至泉州者。入自甲子門。

とあり、之によれば三佛齊の正北は、廣州若くは泉州である。廣州と泉州とは徑度の差約五度に過ぎぬから、當時の人には大して問題としないでもよいと思ふが、是非その何れにか決定しようと云ふならば、恐らく泉州を探る可きであらう。嶺外代答より約五十年程遅れるが、趙汝适諸蕃志卷上三佛齊國の條に

三佛齊間於真臘閩婆之間。管州十有五。在泉之正南。

とあり、諸蕃志に於いては著者が提舉福建路市舶なりし丈、凡て方角の起點を泉州に置いてゐる。例へば

大食國在泉之西北。

渤泥在泉之東南。

流求國當泉州之東。

倭國在泉之東北。

の如き即ち之である。南宋時代泉州は廣東を壓して支那第一の貿易港であつたから、泉州人の海外智識が支那全

國を代表したと云つても差支へあるまい。而して當時の智識に於いて子午線の方向が今日より見れば少しく歪んで、泉州の正南へスマトラ、島東部が来るものと考へられてゐた。東南海、西南海の區分は實に斯の如き、當時の人に考へられたる子午線によつて區分されたものに外ならない。

この事は當時考へられたる閩婆の位置が如何なるものであつたかによつても傍證され得る。即ち嶺外代答卷三には

閩婆之來也。稍西北行舟。過十二子石。而與三佛齊海道。合於竺嶼之下。

とあり、諸蕃志卷上には

閩婆國。又名莆家龍。於泉州爲丙巳方。

とある。丙巳とは南南東、即ち正南より二十二度半東方の謂である。之によつて閩婆が東南諸國の中に加へられたる理由が一層判然する。

嶺外代答には西南海上諸國の中に大食諸國、即ち麻嘉、白達、吉慈尼等を含む廣大な領域を數へてゐるが、諸蕃志には前引の如く、大食を泉州の西北と定めてゐる。諸蕃志には東南海、西南海の名が見えないが、若し諸蕃志の著者が斯る區分を立てようと思へば、西南諸國から大食を除外したに違ひない。嶺外代答の著者周去非は桂林通判とあり、廣西の山間にて傳聞せし智識なれば、遠西の地の緯度の南北などに就いて、元より精確さを求む可くもなり。

嶺外代答の東南海、西南海は殆ど其儘、島夷誌略に現はれたる元代の東洋、西洋に當嵌まるのであるが、此に一言、海と洋の二字の用法に就いて述べねばならぬ。

後世大海に名付くるに洋の字を以てする習慣が定まつたが、古代中世に於いては必ずしも然らず、海と洋とは殆ど同意義に用ひらる。此に敢へて説文から説き出す勇氣を持たないが、只注意すべきは嶺外代答の中に東大洋海、南大洋海の語が見ゆる點である。即ち同書卷一、三合流の條に

海南四郡之西南。其大海曰交趾洋。中有三合流。〔中略〕其一東流。入于無際。所謂東大洋海也。商船往來。必衝三流之中。得風一息可濟。苟入險無風。舟不可出。必瓦解于三流之中。傳聞東大洋海。有長砂石塘數萬里。尾閭所洩。淪入九幽。昔嘗有船舶。爲大西風所引。至于東大海。尾閭之聲。震洶無地。俄得大東風以免。とあり、之によれば長砂石塘、即ち萬里石塘以東の南支那海を東大洋海、又は東大海と呼んでゐたことが分る。然るにこの東大洋海は更に南に延びて閩婆の東に達すと考へられ、之が南大洋海なるものに接してゐたことは、同書卷二海外諸蕃國の條に

三佛齊之南。南大洋海也。海中有嶼。萬餘人僦居之。愈南不可通矣。閩婆之東。東大洋海也。水勢漸低。女人國在焉。愈東則尾閭之所泄。非復人世。

とあり、支那人が盛に海外に交通し出すと共に、廣大無邊なる大海を發見して之に大洋海なる名稱を附したことが知られる。

之と共に航海可能なる大海を呼ぶに洋を以てすることが流行し出したが、前文に

海南四郡之西南。其大海曰交趾洋。

とあり、但し此頃は未だ洋字に決定せしにあらず、海と交互に用ひたるにて、嶺外代答卷一天分遙の條に

欽江南入海。〔中略〕分爲三川。其一西南入交趾海。

とあり、又卷二海外諸蕃國の條に、細蘭海、東大食海、西大食海の海名あり、之は夫々、現今の東印度洋、西印度洋、地中海を指してゐる。

洋字の流行は他の諸書にも見られ、宋史高麗傳に元豐元年安燾等が其地に使せしことを記して

自定海。絕洋而東。既至。國人歡呼出迎。

とあり、宣和奉使高麗圖經卷三十四には、朝鮮に至る海道に白水洋、黃水洋、黑水洋の洋名が見えてゐる。斯く洋字の流行と共に元代に及んで、これ迄の東南海、西南海が、東洋、西洋なる語によつて置き換へられるに至つたのである。

三

元末に成れる島夷誌略に東洋、西洋の語が散見するは山本達郎學士の既に指摘せられし所であり、今同氏によつて、東洋、西洋の範圍を表示すれば次の如くなる。

東洋	爪哇 毘舍耶(菲律賓群島)
西洋	古里佛(印度西南岸カリクト?) 第三港(錫崙島對岸の印度海岸) 馬魯澗(印度デツカン高原)

右の中、毘舍耶、第三港、馬魯澗に就ては和田博士、山本學士に綿密なる考證があるが、今は別にさして精確

さを要求しないので、兩氏の獲られたる結論に従つて、只大體の位置を示すに止める。只古里佛に就いて、之も當面の問題には大なる關係はないのであるが、從來此地が *Quilon* とされてゐるやうであるから、表中に *Calicut* とした點に就いて一言辯じておきたい。

思ふに *Quilon* 又 *Kaulam* は嶺外代答、諸蕃志の故臨、元史外國傳の俱藍であつて、島夷誌略の小唎喃は恐らく小唎喃の誤で新唎喃或は第二唎喃の意味なる可く、それが明の瀛涯勝覽の小葛蘭、星槎勝覽の大・小唎喃に接續するから、その中間に於いて特に、古里佛なる文字を用ひやうとは信ぜられない。

一方 *Calicut* は瀛涯勝覽、星槎勝覽何れも古里を以て音譯し、之はその上直ちに島夷誌略に接するものなれば、島夷誌略の古里佛は即ち古里なること殆ど問はずして知る可きである。思ふに佛の音は *Cal* なる可く、*icut* の轉によりて *icut* を現はしたものであらう。^{註②} 併し何れにしても *Quilon* と *Calicut* とは相去る甚だ近ければ、東西洋の問題には大して障害にならない。

扱島夷誌略が如何なる標準に従つて東洋と西洋を區別したかにつき、山本學士はその中間に、何れにも屬せざる地域、スマトラ、馬來半島、暹羅灣の方面を想定さるゝが、暹羅灣は暫く措くとして、スマトラ東部及び馬來半島南端は取りも直さず、嶺外代答の正南諸國に外ならない。島夷誌略の東西洋は全く、嶺外代答の東南海、西南海の區分を繼承したものであることが、之で分明すると思ふ。

但し東夷誌略の西洋はその西端に於いて著しく領域を縮小してゐること、亦山本學士の指摘せる通りで、之は恐らく地理上の智識が發達し、印度以西の諸國が必ずしも泉州よりも低緯度に存在せざることを知つたが爲と思はれる。このことは亦西洋の語は即ち原來西南洋の意味なる可きを示す一傍證となるであらう。

四

明代に入つて永樂より宣德年間にかけて、前後七回に亘る鄭和の南海遠征あり、このことは「三寶太監の西洋下り」として知られてゐるが、その往先は必ずしも西洋ばかりでなく東洋諸國もその中に加はつてゐた。この遠征に隨行せる馬歡の瀛涯勝覽卷頭の紀行詩に

閩婆又往西洋去。

とあり、同じく鄭和一行に加はること四回に及びたる費信の星槎勝覽前集爪哇の條には

古名閩婆。〔中略〕乃爲東洋諸番之衝要。

とあつて、爪哇の富強が鄭和の船を惹きつけたのである。

猶馬歡によれば印度洋を以て特に西洋と名づけたるらしく、現今スマトラ島の北部に國せし蘇門答剌國の條に其處乃西洋之總路。

とあり、この邊より西洋諸國が始まるらしく、その先、スマトラ北端に國せし南淳里國ランリの條に國之西北。海内有一大平頂峻山。半日可到。名帽山。其山之西。亦皆大海。正是西洋也。

と云ひ、西洋とは正しくは現今の印度洋なるを記し、進んで印度西南岸の古里國カリクトの條に於いて

卽西洋大國。

と述べてゐる。星槎勝覽に於いては古里國の條にも、小俱喃キロンの條にも同様な

西洋諸國之馬頭也。

の一句がある。之によつて明初の東洋、西洋の範圍は宋の東南海・西南海、若くは元の東洋西洋の區分法を殆ど其儘繼承してゐることが知られる。

然るに明の後期に至つて、突如東西洋の區分が大變革を來した。即ち萬曆戊午四十六年の序文を附する張燮の東西洋考を見るに、始に西洋列國考、東洋列國考を載するが、従前と比して最も大なる相違は、これ迄東洋諸蕃の甲たりと稱せられた爪哇、即ち下港が西洋の中に加へらるゝに至つたことである。今東西洋列國を表出すれば次の如くなる。

東洋列國	西洋列國
呂宋 (ルソン) 猫里務 (マリンヅク) 美洛居 (モルッカ)	交趾 (アンナン) 暹羅 (タイ) 柬埔寨 (カンボヂヤ) 舊港 (パレンバン) 啞齊 (アチェ) 柔佛 (ジョホール) 思吉港 (スラカルタ) 暹悶 (チモル)
蘇祿 (スル) 沙瑤訥嚶嚶 (シャニブダピタ ン) 文萊 (ブルネイ)	占城 (チャムパ) 下港 (バンタム) 大泥 (パタニ) 麻六甲 (マラッカ) 彭亨 (パハン) 丁機宜 (トレンガヌ) 文郎馬神 (パンジュールマシン)

如何なる根據によつて、斯く東西洋が區分されたか。成る程東西洋考には後に東洋針路、西洋針路の項があつて、航路によつて以上諸國を結合してゐるが、又思ふに、例へば爪哇に赴くには古くから同一の航路であり、最初は大張スマトラに向ふ針路を取り、途中から又は一旦スマトラに着いてから後に東に分れて爪哇に到達するのであつて、別に明代の航法に大なる變化が起つたとは認められぬ。依て余は再び前に採用したる方法を繰返し、先づ如何なる線によつて東西洋が區分され居るかを検討して見ようと思ふ。

先づ文萊即ちボルネオ、更に詳しく云へばボルネオ島北岸のブルネイに就て、東西洋考卷五には

東洋盡處。西洋所自起也。

とあり、同書卷九東洋針路の項にも略々同様な記事があり、明史卷三百二十三婆羅傳も之を採つてゐる。之によつて東西洋はブルネイを以て境されるが、更に精確に云へば、此地が東洋列國中に數へられてゐるので、ブルネイの西が境界線となる譯である。

ボルネオ島中の國としては外に南岸の文郎馬神、即ちパンジェルマシンの國が擧げてあるが、此國は西洋列國に加へられてゐるから、境界線はこの東方を走つてゐると見ねばならぬ。次に西洋列國中に暹羅、即ちチモール島があり、東西洋考卷九西洋針路の項に

是諸國最遠處也。

とあるから、東西洋境界線はこの島の東にある筈である。その北のモルツカ諸島は、東西洋考卷五東洋列國中に擧げられたる美洛居に外ならざれば、境界線はチモール島を去ること甚しくは遠くない。

所で以上の三點、ブルネイの西、パンジェルマシンの東、チモール島の東を連結する一線を想像すると、之は著

しく折れ曲つたものになる。

然らばこの線の北端は支那の何れの地に當るかの問題が生ずる。宋より明初迄は東西分離の起點は泉州であつたが、萬曆時代は果して如何といふに、恐らく既にそは廣東に移つて居つたものと思はれる。そは天下郡國利病書卷一二〇海外諸蕃入貢互市の條に

廣州船舶往諸蕃。出虎頭門。始入大洋。分東西二路。

東洋差近。(夾註。周歲卽回船。有鶴頂。電龜筒。玳瑁等物。)

西洋差遠。(夾註。兩歲一回船。有象牙。犀角。明珠。胡椒等物。)

とあり、明章潢圖書編卷五六南海の條に

南海居東南委輸之極。爲萬水所宗。故出虎頭甲子二門。則東西二洋。隨船所之。東可以至倭國。西可以通西番。

とあり、更に同書卷四十九廣東水寨の中、一定水寨の條に、

照得廣東八府濱海。而省城適居東西洋之中。其在東洋稱最扼塞者。極東曰拓林。與福建玄鍾接壤。(中略)西洋之稱扼塞者。極西南曰瓊州。四面皆海。(中略)極西曰欽廉。接壤交南。註③

とあり、最後の例は單に廣東省沿海のことを述べたに過ぎぬが、吾人は此等の記錄によつて廣東を中心としてその南方の海を東洋西洋に分つ習慣の行はれたることを知れば足る。而して之は單に廣東人の自己中心主義より來るのみならず、地理的にも若干の理由があつたことと思はれる。即ち早く宋代の嶺外代答にも卷一象鼻沙の條に
管聞之舶商。曰。自廣州而東。其海易行。自廣州而西。其海難行。

とあり、航行の難易が廣東を中心とし東西で異つてゐた。只泉州港の盛なる時は、諸外國の方向をも泉州を中心として定めて居つたが、明中葉以後、泉州衰へて再び廣東が榮へるに至ると、廣東を中心として南海を東西洋に分つ方法が勢力を得て來たものであらう。されば吾人は、新たに出來せる、諸外國を東西洋に分つ境界線の起點は廣東に外ならぬことを推測して誤あるまいと信ずる。

果して然りとせば、吾人は新東西洋境界線が、その南半に於いて甚しく歪曲するに拘らず、その北半に於いては、極めて正確に、殆ど今日の地圖の子午線と全々一致することに驚かざるを得ぬ。即ち廣東省城は東經百十三度、ブルネイは東經百十五度なれば、廣東の直南はブルネイの稍西に當るわけである。一見奇もなきブルネイを以て東西洋の分岐點とするは、この事實を考慮に入れて始めて首肯され得る。

若し夫れブルネイより更に南に延びたる東西洋境界線が、パンジェルマシンの東を通るあたりは猶可なり、それより南してチモル島の東を走るに至つては、今日の常識より見て不可思議に堪へざらんも、こは要するに時代の相違であつて、若し明人の地理上智識に對して餘りに多く具はるを求むるは、寧ろ酷なるものと云ふ可きであらう。

五

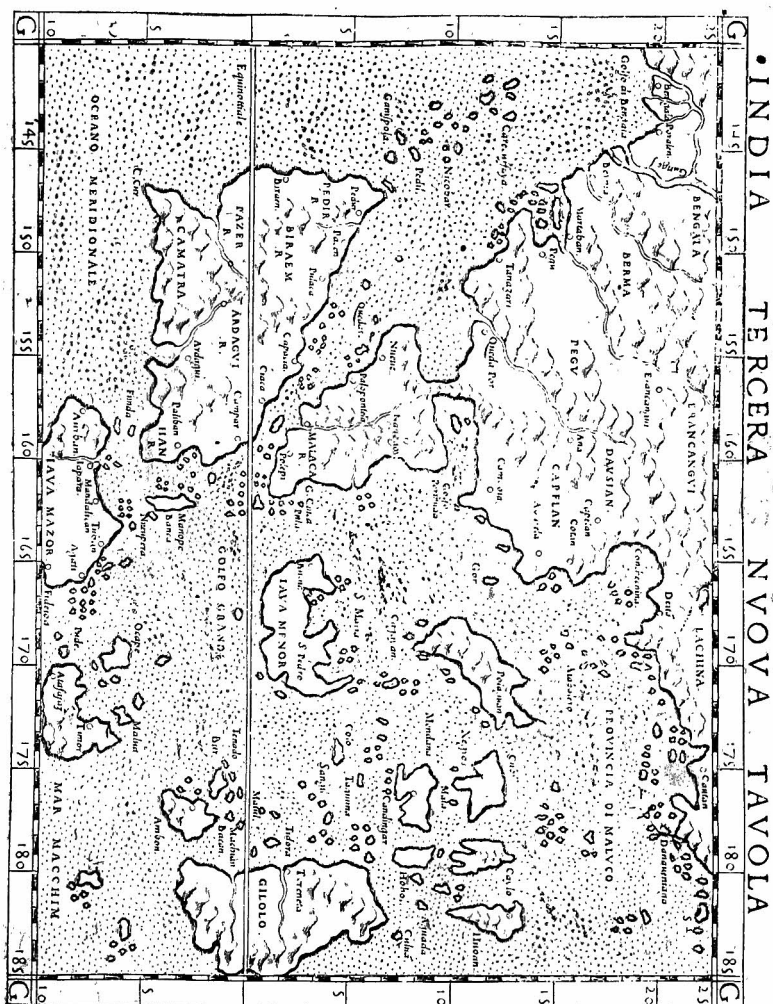
以上縷述せる余の考察にして誤なくんば、東西洋は原來支那人の考へたる四海の一なる南海を更に東南・西南に分ちたる名稱であつて、泉州、或は廣州を起點とし、此點を通過する南北子午線によつて東西に分たんとしたのであつた。而して當時の地理的智識の不完全なるにより、宋元より明初迄は泉州——スマトラ東部の線により、

明後期には廣東——ブルネイ——チモール島の線を以て、正しく東西に劃し得たりと信じて居つたのである。而してその起點が如何にして泉州より廣東に移轉せしかに就ては、未だなほ説いて詳かならざりしものとありと信ずる。支那古來南海の門戸は廣東であつた。然るにこの形勢は南宋頃より一變して、泉州が榮えて廣東が衰ふる傾向を生じた。此點に就いては故桑原博士が「蒲壽庚の事蹟」の中に極めて明快に指摘して居られる。

泉州の開港後四十年許を経ると、宋が南渡して杭州が南宋一代の行在となつた。〔中略〕かくて杭州に近き泉州は地の利を占めた上に、南宋時代を通じて支那政府は國庫の收入を増加せん爲に、頻に外蕃の通商を獎勵したから、泉州の貿易は年一年と長足の發展をして、廣州と頡頏して譲らざる位置に立ち、更に南宋末から元時代にかけて泉州の勢力は、遂に廣州をも凌駕するに至つた。當時支那から海外に出掛ける貿易船、海外から支那に入り來る貿易船は皆泉州に輻湊した。元時代に泉州を觀光した Marco Polo や Ibn Batuta は何れも泉州を當時世界無二の大貿易港と稱してゐる。(五一六頁)

東西兩洋の分岐點を泉州に置く思想は實に斯る時勢を背景とするものに外ならない。而して泉州を通る子午線が西南に歪み、スマトラ東部に落つるに至つたのは、これ貿易風の傾きに影響されしもので、貿易風は正しく南北の方向を取らずして東北↙西南に歪むこと亦周知の通りである。この意味に於いて高桑駒吉氏が、東西洋の區分に貿易風を考慮に入れたる點は以て多とす可きであらう。

泉州の繁榮は永續せず、明の中期以後、西歐人の渡來によりて、再び海外貿易港の王座を廣東に譲らねばならなくなつた。明の正徳九年、西歴一五一四年に始めて葡萄牙人が廣東附近に到着して貿易を營みしより、西歐人の廣東に來るもの漸く多きを加へ、殊に葡萄牙が澳門を占據してから、廣東貿易は泉州を壓倒して、東西交通の



南洋古地圖

1561 A. D. Venetia 刊ノ Ptolemy 地理圖ヨリトリ
タルガ、之ハ Gastaldi ノ地圖ニテ西曆十六世紀前半
ノ智識ナルベシ。註④参照。

第一の關門となつたのである。明末泉州の衰微、廣東の繁榮は、實に支那對外貿易の對象に於いて、アラビヤの勢力と西歐的勢力との交替を意味した。

東西洋區分の境界線の變化も必然的に之と關聯を有する。宋元以來、泉州を起點とするは云はゞアラビヤ的支那地理學の反映であつて、明の後期に及んで廣東を起點とするは、西歐的支那地理學の結論であつた。廣東を通過する子午線がチモル島の西方に落つるといふ想定は、實に西歐人の智識が根幹をなしてゐたと考へられるのである。

この點を證す可き材料は、外に探せば多々發見し得ると思ふが、今余の手許にあるは次の二三の資料に過ぎない。

第一は西歷一五六一年ベネチア刊のプトレミイ地理圖である。(La Geografia di Claudio Alessandrino. Venezia. M. D. LXL.) 同書新圖第二十八、India Tercera Nuova Tavolaと題する圖を見るに、廣東 Canton は東經一七五度、チモル市 Timor は東經約一七三度、チモル島東端は東經約一七四度半に當つてゐる。廣東より子午線を南に下せば、その先端は正にチモル島東方の海上に落つるやうになつてゐる。^{註④}

第二は Nordenskiöld : Periplus 1897, Stockholm 一五五頁に引く所の、Ferando Bertelli の Terza Ostro Tavola. 1565 なる東印度地圖である。この圖によれば廣東は東經一七六度、チモル島は何れの島を指すか判然せぬが、それらしきものと覺ゆる島の東端は東經一七九度、チモルなる文字の中心は東經一八一度の邊にある。即ちこの地圖ではチモル島の位置が前のものより五度程東方へ移動修正されてゐる。

第三は京都帝國大學藏、明萬曆三十年、西歷一六〇二年、利瑪竇の坤輿萬國全圖であるが、之によれば廣東は

東經一二三度、地木島は西端東經一三一度、東端東經一三六度であり、チモル島の位置が更に修正され、廣東よりも約十度東方へ動いて來てゐる。

これ以後は別に縷説するを要しまいが、因に現今の地圖に就いて檢すれば、廣東とチモル島東端との經度の差は約十四度である。最初は西歐人も廣東とチモル島を略と同經度と考へて居つたのが、次第に修正されて來たことが、以上によつて判明したことと思ふ。

チモル島が最初實際よりもずつと西にあつたやうに考へられたるに準じ、ボルネオも又、古い西洋地圖には實際よりも著しく西に位置して描かれてゐる。前記ベネチア版プロレミイ地理圖にはブルネイ Bornea が廣東と經度の差十度の西に描かれ居るが、之も次第に修正され、ベルテリの圖ではその差が六度に縮まり、西紀十六世紀の交オルテリウスの東印度圖では殆ど正確に、廣東の微東南に位置し、之によつた利瑪竇の地圖にはブルネイの名は見えぬが、ボルネオ島は略と正しい經度に準じてその東西兩端が描かれてゐるのを見る。つまり西歐人の考へたる最初の方位によれば、廣東の直南はパロワン島、ボルネオ島の東を過ぎて、チモル島の東へ來たのである。

東西洋考の成立は利瑪竇坤輿全圖の作成よりも十數年以上遅れると思はれるが、著者張燮は勿論之を見たものでなく、只西歐人よりの傳聞によつて、ボルネオが廣東の直南に來ることの新智識を得たるも、その先チモル島の位置に就ては猶舊智識しか有し居らず、新舊兩様の智識を以て東西洋の區分を立てた結果が、前述の如き妙なものになつたに違ひない。

以下は餘論になるが、元代の島夷志略尖山の條に小東洋の稱呼が見える。小東洋に屹立するといふ尖山は普通ボルネオ島西北海中の大ナツナ島に比定せられるが、余としては小東洋なる名稱より、何處か呂宋の北方邊にて探したい。或は呂宋島と臺灣との中間、バタン島中のイラヤ山にはあらずやと思ふのであるが未だ確たる證據を得ない。^{註⑥}明代の東西洋考に至つて小東洋の名が再び現はれ、之は明かに東洋の北に接する東番、即ち臺灣澎湖島を指すものである。蓋し東西洋はもと南海の中の分ちなれば、古來東夷の中に加へらる可き臺灣澎湖島は東西洋の中に入る可からず、只東洋に接するが故に小東洋を以て呼んだものであらう。

小東洋に對して明代大西洋が現はれた。之は利瑪竇が支那へ來て自ら大西洋人と名乗つたのが始めと思はるゝが、彼の坤輿全圖を見ると、葡萄牙の西方海洋中に大西洋と書し、印度西方海中に小西洋と記し、日本の東方海中に小東洋と記入してゐる。

大西洋、小西洋の名は其後も残つて、清雍正八年の自序ある陳倫炯の海國見聞錄には、歐羅巴を大西洋とし、印度を小西洋としてゐる。而して所謂小東洋は小字を去つて單なる東洋とし、別に東南洋、南洋を設け、東南洋は臺灣、菲律賓、ボルネオ方面、南洋は印度支那、ジャバ、スマトラ方面を指してゐる。此に至つて日本は大・小西洋に對して東洋と稱せられるゝに至つたのである。

主として日本を意味する東洋を擴大して亞細亞を意味させ、歐羅巴の西洋と相對立せしむるやうにしたのは、明治以後の日本の學者の力らしい。而もそれは東洋史學者の仕事であつた。所謂東洋史學なるものゝ成立については、歴史と地理第二十一卷第四號に杉本直治郎學士の「本邦に於ける東洋史學の成立について」の中に綿密なる考證がある。この東西洋の區分法は東洋史と共に支那に輸入されて、其儘使用せられて今日に及んでゐる。も

等の暗示を與ふる手引ともならばやと思つて此に附記する。

- ③ 圖書編は諸書の記載を雜然と切り繼ぎしたるもので、此所も何に據つたか明かでない。但し圖書編の作成は卷頭の圖書編家藏記によれば、嘉靖壬戌四十年より始め、萬曆丁丑五年に告成したとあるから、大體に於いて萬曆以前の狀態と見て差支へなからう。

- ④ この圖は殆ど同じものを、Nordenskiöld: Periplus. 1897. Stockholm 一四三頁に掲載し、その説明に The East Indies by Gastaldi: In Geographia de C. Ptolemeo. Venetis. 1548. とあり、恐らく従ふ可きに似たり。果して然らば之は西曆十六世紀前半の知識を示すものである。十七頁の地圖参照。

- ⑤ Orelus の地圖は、最初に Theatrum Orbis Terrarum. 1595. Anvers. を出したが其中に含まれたる各圖は更に古き紀年を明記するもあり、第二版以後更に新圖を加へたのでこの東印度圖も何年の作成になるものかを詳にし得ない

- ⑥ 尖山は島夷誌略に

自有宇宙。茲山盤據于小東洋。卓然如文筆。挿雲漢。雖懸隔數百里。望之儼然。

とあり、この尖山を菲律賓北邊に求めんとすれば、東西洋考卷五呂宋形勝名蹟の條にある圭嶼が有力な候補となる。

圭嶼。爲其出。與吾澄圭嶼相類。因襲今名。

とあり、東西洋考の頃に古の某名を改めて圭嶼としたことが分る。而して支那の圭嶼は同書卷九內港水程に

圭嶼。屹立海中。爲漳之鎮。邑人御史周起元。力請當道。建塔其上。并構天妃宮。文昌祠。大士閣。

とある。圭と筆とはその形極めて相似たれば、誌略の著者が筆と見たるを、後世の人が圭と見立てたるは極めてあり得可きことに屬する。

然らばこの圭嶼は何處にありやといふ問題になるが、呂宋島と臺灣との中間にバタン島あり、そこにイラヤ山 Iraya といふ高山がある。Census of the Philippine Islands 1918 第一卷九八頁に面する挿入地圖にこの山の標高二六〇米とあり、その山の南の入江に註して Safe Landing in S. W. monsoon とあれば帆船航行時代には呂宋より臺灣に渡る際の要港であつたに相違ない。猶同書九五頁には、「天氣晴朗の日にはこの山の頂より臺灣の諸山が望見し得る」とあれば、臺灣の諸山の頂上よりもこの山が望見し得る筈であり、島夷誌略の、「數百里を懸隔すと雖も、之を望めば儼然たり」の文とよく一致する。